

ハンドボール競技における右バックコートプレイヤーのシュートプレーの特徴

～2009年女子世界選手権を対象に～

氏名 山野 由美子 (200712100、ハンドボール方法論)

指導教員：河村 レイ子、會田 宏

キーワード： 右バックコートプレイヤー、ロングシュート、

【目的】

世界のバックコートプレイヤーは日本のプレイヤーに比べて長身であり、ジャンプ力があり、投力に優れている。また、パスやフェイントの技術にも優れている。このような世界の右バックコートプレイヤーが「どのようなシュートを打つか」を明らかにすることによって、小中学生の段階からトップレベルまでの日本の右バックコートプレイヤーの目指すべき技術を示すことができる。本研究では、国際レベルの女子ハンドボールにおける左利きの右バックコートプレイヤーを対象に、そのシュートプレーの特徴・傾向を明らかにし、自身のこれからの競技生活に生かしていきたい。

【方法】

対象者は 2009 年女子世界選手権に出場した左利きの右バックコートプレイヤー10名である。

ゲーム中のシュートプレーを観察し、「ボールをもらう前の動き」「ボールをもらう前のエリア」「ボールキャッチ時の間合い」「ボールキャッチ時のエリア」「助走の歩数」「フェイントの種類」「シュートの種類」「ステップパターン」「シュートスイング」「シュートエリア」「シュート結果」の11項目を調査した。

観察項目ごとに生起数を集計し、その割合を求めた。その後、左利きの右バックコートプレイヤーのシュートプレーの特徴・傾向を明らかにするためにカイ二乗検定と残差分析を行った。

【結果と考察】

1. ボールをキャッチする前のプレー

インの動きと直線の動きが、アウト、アウトからイン、インからアウト、静止に比べて多く用いられていた。また、左側エリアでのプレーが真ん中、右側に比べて多かった。

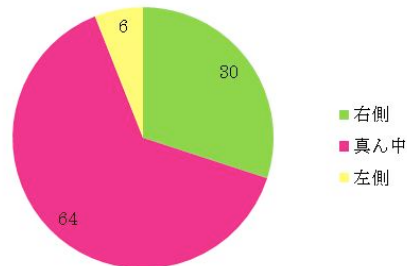
2. ボールキャッチ時のプレー

接触なしのプレーが接触ありのプレーに比べて多かった。また、真ん中エリアでのプレーが左側、右側に比べて多かった。

3. ボールキャッチ後のプレー

3歩が0歩、1歩、2歩に比べて多く用いられていた。フェイントの種類は、フェイントなしがボディ

フェイク、ステップシュートフェイント、ランニングシュートフェイント、パスフェイク、回旋、ジャンプシュートフェイントに比べて多かった。シュートの種類は、ロングシュートがミドルシュート、カットインシュートに比べて多く用いられていた。ステップパターンは、ジャンプがランニング、ステップ、スタンディングに比べて多く用いられていた。シュートスイングは、オーバーハンドがサイドハンド、アンダーに比べて多く用いられていた。シュートエリアは真ん中エリアでのプレーが左側、右側に比べて多かった (図1)。



カイ二乗値=50.96, $p < 0.05$

図1 シュートエリア

4. シュートプレーとシュート結果

いずれの観察項目においてもシュート結果（ゴールイン、ノーゴール）とシュートプレーとの間に有意な関係は認められなかった。

【結論】

世界のトップレベルの右バックコートプレイヤーは、ボールをキャッチする前は自分のホームポジションからインへ走りこむ動きが多く、3歩使ってジャンプし、オーバーハンドで、最終的にはインに大きく動き、コート中央のエリアでシュートしていることが分かった。これは非常に単純な動きである。また、シュート結果とシュート達成までの過程に関係性がないこと、つまり、シュートが入る動きがあるわけではないことが分かった。